

2015森を走ろうシンポジウム(第6回) 本シンポジウムの開催趣旨と経過

山西哲郎

開催趣旨

「森を走ろう」とは、自然環境と地域環境を生かした
スポーツ文化再生、創造を願い山野を走る
フットランスポーツ種目の共有の語り
(対話)の場とすることがねらいである。

経過

- 第4回(2013.1)

フットレース種目の現状と連携・組織論

多種目のフットレースはいかに共有出来るか

第1部 ランニングレースの種目特性とトレーニング法を考える (鎬木、伊藤、村越ら)

山野や道を走るレースの特性は体力・技法・精神の項目で明確になる。それに応じたトレーニングや練習、戦略が創られ、それぞれの専門的立場から競技性を整理、相互理解を深めることによって、クロストレーニングや技術を編み出しさらなる向上を目指す機会としたい。

第2部 野外ランニングの組織・大会の連携 (八木原、鎬木ら)

フットレースのなかでもトラック、マラソン、駅伝との長距離競走は歴史も長く、組織化は進んでいるが、他の種目の多くは組織化いまだにできず、共有できる理念や普及、強化のための論；愛好者の利益や趣味であってはならず、それにはともに時空間を持って議論や相互の競技が可能となる連携する組織が必要である。そこで今回は、その組織化をしようとしている人たちの現状報告を聞き、今後、トレイルランをはじめ野外フットレースの組織化の方向性を出したい。

第5回 2014年1月13日

テーマ **自然ランニングを共有できるか
連携と組織づくり**

第1部 各種自然ランニングスポーツの現状と課題

•提案・発表者

鍋木 毅(トレイルランナー)、八木原罔明(日本山岳協会副会長)、村松達也(岡山フォーラム代表)、村越 真(JOA理事)、千葉達郎(スポーツマネージメント) 山西哲郎(JOA会長)、

•第2部 野外ランニングの組織・大会の連携 の道を探る

•まとめ(村越)

•トレイルランニングに焦点

- 鍋木 毅・・・地域や社会に対するトレランの果たせる役割

- 千葉達郎・・・トレラン大会の地域へのインパクト

- 村松達也・・・アメリカの例から利用者側の自己規制、愛好者のライフサイクルの視点から組織の必要性

- 八木原日山協副会長・・・日山協のトレランに関するルールづくり

- パネリスト、フロアーの思いは一致したものではなかった。その主張も個人の道徳的意識の問題、活動者のつながりと、思惑は多様。それだけこの会の意義あり、今後、連絡協議化の提案

森を走ろうトレイルを語る対話集会

日本オリエンテーリング協会 森を走ろう連絡協議会

第1回

日時：2014年8月3日（日）

参加者 10名 トレイルラン愛好者、フリーライター、環境省国立公園課、都自然公園担当者など、

- マナー
- 人数が多すぎる 1,000-2,000人だと
- トレイルへのダメージが大きい。影響を調べ始めている。

◎ ガイドラインが必要

トレイルが問題 保護と利用の共立

ロードレーサーからのビギナー、登山者との違い

直接対話が必要

第2回

9月20日

参加者 トレイルランナー、ランニング指導者、新聞記者、主催者

- 学習会的に開催
- 登山文化とは。その歴史と今日の問題
- 日本勤労者山岳連盟理事長 浦添寿徳
- 市民レベルの立場から登山文化を創り、今日も自然保護憲章の作成を多くの
- 関係団体や組織とも協議中。また、トレイルランナーについても検討中

資料: 労山自然保護 自然保護憲章

トレイルランニングをスポーツ文化の創造へのための本質

- スポーツの発達

遊び (play) → ゲーム → クラブ・仲間 → 大会

個人 (身体と精神) 集団 (ルールとマナー) 社会のなか

時空間

トレイル (小道) → 自然の道 (獣道) → 人の道 → スポーツの道

自然も、人間も、スポーツも感性と科学で成り立つ

スポーツで

楽しさを喜びにできるか